

---

# IS インフィニット ストラトス 〈転校先は女だらけ!〉

キッド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット ストラトス へ転校先は女だらけ！？ へ

### 【Nコード】

N3028Y

### 【作者名】

キッド

### 【あらすじ】

廃人女神によってISの世界に転生させられた主人公そこで全ての原作をぶち壊す

ちなみにコレは作者が此処にいたら、てきな事になっています

主人公チートが嫌な人は今すぐ回れ右

## 転生（前書き）

どうも

キッドです

駄文かもしれませんが楽しんでください

## 転生

何処だ？此処は？

白い空間

水中のような感覚

テレビ見ながらゲームしている少女

（。□。）」

何このカオス！？

「あ、いらっしやうい」

テレビ見ながらゲームしていた少女がこっちにきた

「誰だ？」

「女神です」

女神・・・・・・・・・・・・・・・・ねえ

「何よその顔」

「自分が何してたか言ってみろ」

「戦○B A S A ○Aやりながらアニメみてた♪」

廃人じゃねえか

「ゴメンネ

殺しちゃって」

ああ死んだんだなら納得出来るな

「怒らないの？」

「理由がないし、どうでもいいからな」

「お詫びに転生させちやるぜ！！」

何故急にハイテンション！？

「世界は？」

「あれ？普通の人は元の世界に戻りたがってたのに」

「どうせ無理だとわかってるからだ」

どうでもいいから早く第二の世界が知りたい

「世界は————ISへインフィニットストラトスです♪」



「ちなみに決定している武器は、炎王剣、雷王剣、○国B○SAR  
○の風魔小太郎の小太刀、さらには天上天下天地無双刀だよ♪」  
この女神、B A S A R A だけじゃねえ……森羅万象とモ○ハン  
までやってやがった

完璧な廃人だ

「で？武器は？」

武器

素手・ライフル・鞭・大鎌・ショットガン・マシンガン・ハンドガ  
ン・グレネード・ハンマー・斧・薙刀

「コレで良い」

「では、おねーさんがサービスとして高速切替ヘラピッド・スイッ  
チの能力もあげよう」

「いってらっしゃい♪」

## プロローグ？（前書き）

駄文だ（泣）

暖かい目でみてください



## プロローグ？

何だろう？

周りが狭くて暗いそれに何だか暑い  
燃えてる？火事？何処が？

『ゴメンネアナタが死んでくれればお金がたっぷりなの』  
誰？親？  
最悪だ

ダメだ煙を吸いすぎで意識が………

此処は？

「目が覚めたかい？」  
誰？

あれ？左目が開かない

「どうしたんだい？」

「左目が開きません」

とりあえず左目が見えない事を話す

「そうか………」

「此処は何処？」

「此処は病院だよ」

病院？

バタバタバタバタ

「先生！！」

看護婦が息を切らしながら来た

「どうした！？」

「メスとホルマリンが一つ足りません！」

「なんだと！？」

どうやら大変な事らしい

「君はもう退院できるからね」  
「わかりました」

——パシユ——

久々の外だな

「むグッ」

なんだ？とても眠くなってきた………また——意識が——

——

また、見慣れない天井だ

「目覚めたかNo. 038」

はあ？No. 038って何？

おまけに此処は何処？

もう何がなにやら

「No. 038とはお前だ、そして此処は我々亡国機業ヘファント  
ムタスク」の研究所だ

貴様は親に70億で売られたのさ」

売られた………何故？わからない

「アナタには我々の実験体になってもらう」  
実験体？

「俺は何もできんぞ」

「大丈夫アナタはただ寝てれば良いから」

スッゲェ嫌な予感がする

「とにかく付いてきなさい」

「承知」

その後手術室らしき場所で眠らされた

「起きろNo. 038」

あれ？

「俺に何をした」

「これを殴ればわかるわ」

そう言っただけで女が見せたのはデカイ鉄板

それも一枚や二枚じゃない

「拳がおかしくなるから却下させて貰う」

ビシッ

「痛っ」

「やれ！」

「やだ」

ビシッ

「やれ！！」

俺は何回も鞭で叩かれた為渋々鉄板をなぐる

バシィ

バアアアン

鉄板が跡形もなく壊れた

「何をした」

聞くと女がケラケラ笑いながら説明してきた

「我々の強化プログラムを組み込ませて貰った」

それがこれか

「ではデータを取るやれ」

そんなデータ採りが終わり

「何だこれは？」

「ISだ、それは女性にしか動かせない」

へえ

ピトッ

「なんだ!？」

いきなりISが光り出した

「ISが消えた？」

目の前に合った筈のISが無い

「自分をよく見ろ」

な!! ISが装備できてる!？

再びデータ採り

—そんなことが5年続き—

「さて、No. 038よ、コレが最後のデータ採りだ」

そう言って女が出したのは注射、明らかに中身が怪しい……………

……………

ブスッ

「うわああああああアアアアアアアアアア

はあああ

なんだ今のは？

「体調はどうだ？No. 038」

体調……………

「変化なしです」

「そうか……………では成功だな

喜べ、コレでお前は自由だ」

――  
再びの外ダアアア

「いてっ」

！！ISが！！

あゝ人前でIS装備しちゃったよ

「君！」

うわぁ知らないオッサンに話かけられたよ

「何ですか？」

「IS学園に転入してほしい！」

俺が！？

まあいいか

「わかりました

IS学園に転入します」

IS学園・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・ISしか無いか・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・一体何があるかな・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・

## 転校（前書き）

駄文かもしれませんがよろしく願いします

主人公の記憶を戻します

多少強引かもしれませんがよろしく願いします

## 転校

IS学園

「何すか？このIS？」

「わかりません、君が来た少し前に現れましたから」  
うゝむ

「とりあえずコレがアナタの専用機になります」  
わかりました

待機モード

（蒼へあお）のマフラーか、だが暑くない）

パサッ

ん？

手紙？

『ども〜！女神だよ♪』

実は上司に神との会話と原作知識を無くしたら転生の意味ないだろ  
って怒られたので、記憶を戻します、そこでの記憶は消えたりしな  
いからね♪

後テレパシーできるからねよろ♪』

なんだこれ？

うおっ

記憶が戻った？

『あー、あー、テスト、テスト女神聞こえたら返事せよ』

『バッチリ聞こえてまゝす』

『了解

ところで、武器の素手だが、殴ればシールドエネルギーが減るのか  
？』

心配な事を確認してみる

『それは攻撃するときは、ストライクって唱えて、防御の場合はイ

「Iジスだよそうすればシールドエネルギーは減らないよ」  
「今度はガンダムかよ」  
「ん？」

『イージスって唱えらると何処殴られても大丈夫なのか？』

『それは、脚の裏と手だけ、ガードできるのは』

『了解』

I Sの名前ってなんだ？』

「肝心なのを忘れてた」

『名前が思いつかなくて……………』

「無いのか、名前が」

『決めた！』

『どうしたの！？』

「俺ってずっと室内に居ただろ？俺は空を飛びたかった、だから――」

――』

『――だから？』

『蒼天へそうてん』だ』『良い名前だね♪I S学園生活頑張ってるね』

♪

――1年1組前――

「はあ、待機すんのもめんどいな」

「まあまあそう言わずに」

「誰だ！？」

「シャルルか、今は男装verか」

「出来るだけ背後には立たないで……………反射で手刀を当てそうになる」

「あ、うん、気をつけるよ」



「合図だ、入ろう」  
「あいよ」

パシュッ

「失礼します」

「・・・・・・」

「右におな——！！」

順番は上からシャルル、ラウラ、俺だ

「この・・・・クソ姉ガアアア！！」

ガシッ

ダン！！

一夏side

なんだ！？転校生が入ったと思ったらいきなり叫んで風魔先生に殴りかかったぞ！！

しかもかなり早い！

でもすぐに千冬姉にホールドされた

あのスピードに対応するとはやっぱり千冬姉は凄い！

主人公side

クッ、この人力が凄い

「貴様、何故風魔先生を殴ろうとした！！」  
理由か、しいて言うなら

「家族に殺されかけたがらだ

クローゼットに閉じ込められ、放火されてね」

真実の一部を話す

「待って、その時私はアメリカにいた」  
えっ!?

「つまり俺が殺されかけた時、朔姉はアメリカにいて、関係してないって事か?

だとしたら、・・・・・・・・・・ゴメン朔姉・・・・・・・・・・殴ろうとして」

「織斑先生、放していいですよ」

「わかりました」

「では、自己紹介をしろ」

織斑先生って呼ばれた人切替早いな

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました、不慣れな事が多いと思いますが、よろしくお願いします」

「きゃ――」

「へ?」

「ん?」

『きゃああああー――っ』

ぐおっこれが噂のソニックウェーブってやつか鼓膜があああ

「男子、2人目の男子!」

「美形、守ってあげたくなる系の!」

「3人目もいる!」

「クール系、いじられたくなる系の!!」

「あー、騒ぐな、静かにしろ」シーン

あれだけ騒がしかったクラスを黙らせるって、すげっ

「・・・・・・・・」

だんまりですか

「「挨拶をしろ(しな)ラウラ」」

「はい、教官」

へ?教官?朔姉、アナタは何をしていたのですか?

「此処では、私達の事は織斑先生と風魔先生と呼べ」  
「了解しました」

見るからに軍人だな

「ラウラ・ボーデビッツヒだ」

終わりがい

「貴様か」

パシン

あいついきなり何してんの！？初対面の人叩くとか

「私は認めない。貴様があの人の弟など

それに、貴様もだ」

俺もですか？

叩かれないだけよしとするか

「最後に風魔」

俺か

「風魔 浩輝だ、気軽にロキで良い

そこにいる、風魔 朔とは姉弟だ

質問は御自由に」

「はいいつもくん」

いきなりかよ

「何ですか？」

「好きな食べ物は何？」

そこかよ

「辛い物とホットドックだ」

「はい」

「はい、ラウラに叩かれた奴」

名前？知ってるけどなんとなくそう呼んだだけ

俺は誰に話してるんだ？

「そんな風に呼ぶな！」

「質問は？」

「なんでマフラーしてるんだ？」

「ISの待機モードだ」

「時間だ、SHRを終わる

今日は二組と合同で実習をする、織斑、同じ男子だ、風魔とデュノアの面倒をみてやれ」

「よろしく、僕は」

「シャルル、織斑一夏、だらけてる時間はない、早く行くぞ」

「わかってる」

「あ、うん」

【次回はIS実習】

## I S 実習そして打ち明けられた真実（前書き）

戦闘シーン、うまく書けてるか不安ですf ^ \_ ^ ;

それについてのアドバイスを待ってます

少々シリアスかも

よろしく願いますm ( \_ \_ ) m

## IS実習そして打ち明けられた真実

タッタッタッタ

俺達は今走っている、

「なあ、織斑 一夏俺達は何処で着替えればいいんだ？」

「今空いているのは・・・第2更衣室だな」

「了解」

「う、うん」

？シャルルの奴落ち着かなそうだな

まあ本当は女子だからな

「トイレか？」

ドテッ

「ん？どうした？」

「お前はいつもそんな感じなのか？」

「まあ、そうだな」

「はあ、普通どうした？って聞くもんだろ」

「そうか」

流石一夏だな

「ああ！転校生発見！」

「しかも織斑君と一緒に！」

しまった、女子に見つかった！

てか、情報広まるの早いな

「いたっ！こっちよ！」

「者共出会え出会いい！」

武家屋敷か此処は！？

「なあ、織斑 一夏」

「な、なんだ？」

「此処は・・・・・・・・・・何処？」

ヤベッ変な質問になった

「一応、IS学園」

「……一応なんだ

「そんな事よりいそごうよ」

「そうだな、うちの担任は時間にうるさいからな」

更衣室

「時間がやばいからな早く着替えようぜ」

「だな」

シャルルの顔が赤くなってる、原作道理だな

「シャルルも着替えろ

俺は奥で着替えてるからな」

「おう、わかった」

「一夏着替え終わったか？」

「シャルルとロキ着替えるの早いな  
なんかコツでもあんのか？」

「気合い」

「それ答えになってないよ」

「とりあえずいこうぜ」

「承知」

第2グラウンド

「やっときたか」

「ゴメンネ朔姉」

シュツ パシィ

「殺す気か！」

眉間狙ってクナイ投げてくるとは

「風魔先生と呼べ

そしてさっさと列に並べ」

バシーン

あ、誰かが織斑先生に出席簿アタック受けたな、原作では凰 鈴音とセシリア・オルコットだがん？ 此処までは原作道理だが、山田先生がいないから誰が相手すんだ？

「相手は——風魔！」

「へ？俺！？」

最悪だ

「なんで俺なんですか！？」

「なんとなくだ、早くしろ」

こんな先生で大丈夫かなあ

「まあいいか、始動せよ！『蒼天』」

初実戦だが勝てるかな？

「はじめ！！」

ジャツク  
大鎌展開

「では、行きます」

「行くわよ！」

「参る」

バンバン シュツ

セシリアのライフル《スターライトmk?》から放たれるビームを  
交わす

「隙あり！」



「ちっ！」

ガキッ

よけた方向に鈴がいて刀を振り下ろす、それを鎌を使ってガードしてなぎはらう

「なるほどねえ（やっぱり一夏と同じく武器はあれだけね）」

騙せてるな、武器はこの鎌だけだと思っている

——地上——

「凄いな、あの二人相手に……でも防戦一方だな（武器も鎌だけだろうし）」

「もうそろそろだな」

「ですね」

「（どっちが勝つんだ？）」

——空中——

「OK、わかった」

「わかったって何がですの！？」

パターン

「行くぜ」

ぶんぶんぶん

「やけになっても当たらないわよ」予想通り

ガンッ

「「あうっ」」

今だっ！

「ドラゴン……アタアアック！」

「「キヤアアア！」」

ドーン

二人を地面に叩きつけて勝負はついた

「俺の勝ちだな」

最後のムシ○ングのダゲキ技は古すぎたかな？

「コイツの実力がわかった所で実習を始める」

織斑先生が言い終わった瞬間、女子が俺達三人を囲んだ

「織斑君、一緒に頑張ろ」

「デュノア君の操縦見たいなあ」

「ロキくん」

「そんなにグラウンド20周がほしいか」  
ザッ

はやつ！一瞬で列になったよ

そんなこんなで実習が終わった

——昼休み——

俺は屋上に居る

「お、一夏じゃんか」

「ロキも一緒にどうだ？」

「遠慮しとく、邪魔したく無いからな」

「じゃあまたな」

「そんな時は大丈夫だろ」

俺の飯はパン二個だから早い

「アリーナでも行くか」

「なんだロキ、もういたのか、はやいな」

「皆さんおそろいで」

「なあ、ロキ、模擬戦しないか？」

「構わない」

「なら、来い白式」

「はじめ！！」

シャルルの審判が始まった

「おらあ」

ガキッ

「やるな」

「刀だけだとキツいだろ」

「まあな、でも、それはお前も同じ」

よし、うまく騙せてるな

俺は一夏から距離をとり、右手にショットガンを出す

「鎌だけじゃなかったのか！」

バァン

「鎌だけとは言っていないぜ」

弾が全部当たり、一夏が怯む

「隙だらけだ」

そして、鎌で斬り、ショットガンで撃つ、これを繰り返したら勝負はついた

「まあ頑張れ」

「ねえ、ちょっとあれ」

「ドイツの第三世代型だ」

ドイツ・・・と言うことはラウラか

「ロキ、私と戦え」

えゝ

「ロキ、顔、顔」

「え？ああめんどいからつい」  
バァン

ラウラのレールカノンを鎌で弾く

「やれやれ、せっかちだなあ、OK、じゃあ、やろうか」

『その生徒、何をやっている！』

「ふん、今日は見逃してやる」

「良かったな、命びろいして」

「・・・なんだと」

俺はISを解除した

「じゃあ先帰るわ」

「また明日な」

「バイバイ」

――廊下――

ふと思った、俺の部屋、どこ？

「ロキ」

「あ、風魔先生、何ですか」

「女子との相部屋と屋上どっちがいい？」

何その選択肢

「屋上で」

「だと思った、ほら、テントに、仮設シャワーに寝袋、あとはハーモニカと抱き枕だ充電器と着替えもある」

「ぶっ！！とりあえずもらっておくよ」

――寮への道――

「一夏、何してんだ？」

「（シッあれ）」

一夏が指差したところには、織斑先生と朔姉、あとラウラもいた

「――ドイツで再び我々にご指導を。ここではあなた方の能力は半分も生かされません」

「ほう」

「なんでそう思う」

「意識が甘く、ISをファッションかなにかと勘違いして」  
「そこまですておけ、小娘」

「（朔姉？）」

「代表候補に選ばれただけで偉くなったな」

「時間だ、寮に帰りなさい」

「その男子！盗み聞きとは感心しないな」

そういえばタイミングが原作と違うが、何故だ？

「寮へ帰りまあゝす」

「まったく」

夜

「まあ準備は出来たし、ハーモニカでも吹くか、先生に見つからないよう」

一夏side

「えゝと、シャルル」

「一夏、ちょっと屋上に行こう、風に当たりたいんだ」

「わかった」

♪♪♪

「（何だろう、良い音色）」

ロキside

ガチャ

ん？誰か来たか？

「なんでロキが此処に居るんだ？」

その声は一夏か

「よう一夏、それにシャル……ル？」

おかしい、シャルルは男の筈、いずればれるがもう少しあとのはず、

何故、何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故

「しゅゝゝゝゝ」

「ロキがショートした」

「うう、んシャルル、もう女だってばれたのか」  
「もう？」

「まさかロキ、知ってたの!？」

「ああ、すまないがそれだけでは無いんだ」

「え？」

「シャルル、いや、本当の名前はシャルロット・デュノア、フランスのデュノア社で非公式のテストパイロットをしていた

此処に男装して来た理由は特殊ケース、つまり一夏のデータを取ったこいと言われた、さらに言えば、父親とは数回しかあった事が無い、会話も少し・・・」

「なんで全部わかったの？」

「そうだぜロキ、何でなんだ？」

「なあ、女神』

『はいはい何かな?』

『おれが転生者だって事言っていないか?』

『良いよ、君の好きなようにしなよ』

『感謝する』

「ロキ？」

許可もでたし

「知ってた理由はお前らにしか言わない、俺は元々この世界の住人じゃない」

「どうゆうこと？」

「つまりは転生者」

「「転生者!？」」

「ああ、だからわかった、一夏の友達に五反田 弾って奴が居て、IS学園を女の園って言った」

「確かに言った、だがなんで過去と未来がわかるんだよ」

「元の――一度死ぬ前の世界ではこれは小説になっていた」

「本当なのか!？」

「ああ、少しズレがあるがな」

「で、シャルル、これからどうすんだ？」

「本国に強制送還、良くて牢屋かな」

「あー、違う違う、そんな上や親なんかじゃなくて、お前がどうしたいか、お前の気持ちが知りたいんだ」

「え、でも」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする

つまり三年間は無事だ、その間に考えればいいさ、シャルル、お前の気持ちは？」

「僕は・・・この学園にいたい！」

「フツ、決まりだな」

「それにしても特記事項なんて五十五個もあるのによく覚えられたね」

「よく読んでるからな」

「そっか。ふふっ」

「女の子らしい顔も出来るじゃん♪」

「やっぱり女子だな」

「俺達は部屋に戻る。また明日な」

「お休み」

「お休み、また明日な」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3028y/>

---

IS インフィニット ストラトス 〈転校先は女だらけ!?!〉

2011年12月3日20時55分発行